

学 び 合 っ た 学 級 づ くり —学習意欲と人間関係—

所属校：八王子市立第三小学校
氏名：久保明彦
派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：学び合い・学級経営・学習意欲・人間関係

I 研究の目的

今日、人とかかわることを面倒だととらえたり、自分の考えに固執し、他者の考えを受け入れなかったりする児童が少なくない。一人遊びや2、3人で遊ぶことを好む児童や、自分の考えや思いを十分に伝えることができず、小さな困難にも対応できない児童も増えている。「人とうまくかかわれない」「かかわり方を知らない」「かかわることを嫌がる」といった傾向が見られ、児童の「人とかかわる力」が低下してきている。

中央教育審議会においても、繰り返し今日の子どものたちの人間関係の希薄化やそのことによる人間関係を築く力、集団活動を通じた社会性の不十分さが指摘されてきた。この現状などを踏まえ、今回の学習指導要領改訂で特別活動の全体目標に「よりよい人間関係づくり」が明示された。また、東京都教育ビジョンにも「人間関係を築く基礎となる力の育成」が重点施策の一つとして掲げられている。

あわせて学力低下も叫ばれ、各学校において学力向上に向けた取組も行なわれている。特に学習意欲の低下が懸念され、学習指導要領改訂でも「学習意欲の向上や学習習慣の確立」を改善の方向性の一つとして取り上げている。（「変化の激しい時代にあっては、知識の陳腐化が早まり、学校で獲得した知識を保持するだけでは十分ではない。いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、よりよく問題を解決する資質や能力が求められることになる。このため、学校教育においては、知識の伝達だけでなく学習意欲の向上等が重要な課題となる」（文部科学省）

このような状況の中で、学校生活の拠点でもあり、社会の縮図でもある学級において、児童は日々学習に取り組んでいる。学習意欲はおもに個人にかかわるものではあるが、所属する学級がどのような状況にあるか、学級でどのような学びに取り組んでいるかは、個人の学習意欲にも大きく影響を及ぼす。

本研究では、自ら人とかかわり、他者から学ぼうとする児童を育成するための「学び合う学級づくり」のあり方を追求するため、その学び合いの活動形態の一つとしてリテラチャー・サークル（以下、LC）を取

り上げ、活動の観察や体験から学び合いについて考察し、今後、学び合う学級づくりへの取組に迫りたいと考える。

II 研究の方法

先行研究にあたるとともに、学び合いの授業の要素を検討するため、読書指導の手法として研究されているLCを通して分析した。

LCとは、本を読んできて話し合うサークルのような楽しい雰囲気での活動である。自分が読んでいることを同じグループの仲間に伝えること、グループの他者の読みを知ること、その互いの読みについて楽しい雰囲気の中で話し合う活動が構造化されている。

LCに関する様々な研究が進む中で、学校の授業で用いることができる方法として、実践されている手順を簡潔に示す。

- ① 教師が児童に読ませたい本を何種類か（1種類に数冊を準備）紹介する。
- ② 自分が読みたい本を選び、同じ本を選んだ児童同士でグループを作る。
- ③ 授業で取り組む回数をもとに、グループで読むペース（範囲）を決める。
- ④ グループの中でいくつかの役割分担を決め、それに応じてその部分を一人で読む。
*この役割は優れた読み手が行っている読み方（自分の経験とつむぎながら読む、疑問をもちながら読む、情景を思い浮かべながら読む等）を意識的に行うためのものである。
コネクター・クエスチョナー等の役割がある。
- ⑤ 一人読みの成果（役割シートに記入）を持ち寄り、グループで自分がどのような本を読んできたかを披露し、話し合う。
- ⑥ ④⑤を役割を替えて繰り返し取組、一冊の本を読みきる。
- ⑦ 評価はその都度、自己評価とグループでの相互評価で行う。
- ⑧ それぞれのグループで話し合ったことを学級で紹介する。

上記の手順をもとに、下記1・2において、授業観

察や活動体験を行なった。

1 連携協力校

実習研究Ⅱでの連携協力校における担当教諭の授業実践『文学（リテラチャー）サークル』を数回、観察するとともに、事前・事後の取組での留意点や有用性、教師の姿勢及びこれまでの実践などについて詳細に指導を受けた。

2 教職大学院

教職大学院での人間教育実践課題研究において、LCについて資料を通して学習し、学生・教員で実際にLCを体験した。宮沢賢治の「雪わたり」を題材にして取組、実際にLCを体験した感想をもとに、グループごとにLCや学び合いの授業について討議した。

Ⅲ 研究の結果

1 観察

- ・ 少人数で同じ本について自分の読みを発表したり、話し合ったりすることをとても楽しみにしていた。
- ・ 回を重ねるごとに話し合いの進め方が上手になり、互いに気を配りながら、それぞれの役割での読みをグループで膨らませていた。
- ・ グループに同じ役割の児童がいないので、責任が伴うとともに、互いに新鮮な気持ちで話を聞き、受け入れていた。
- ・ 話し合いが脱線することもあるが、その話の広がりの中で、それぞれの自分の考えを述べ合っていた。
- ・ 役割ごとのワークシートがなくても、グループで話したいことが頭に浮かんできており、本当に実感した内容を伝えていた。
- ・ 作品の疑問点をだし（クエスチョナー）、話し合うだけでなく、読んで浮かんだ情景を絵に書いたり（イラストレーター）自分とのつながりを見つれたり（コネクター）するなど、それぞれの役割が機能していた。
- ・ 教師があたたかく見守っていた。各グループをまわり、同じ立場に立って、話を聞きいたり、話を引き出したりしていた。
- ・ 振り返りの中で、グループでどのように話し合うと更によくなるかを自分たちで、その都度考えていた。
- ・ 教師は、児童が読書したことを表現することができ、そのこと自体が楽しいと思えるように様々な支援をしていた。

2 体験

- ・ 視点をもって作品を読み、それぞれの視点から意見を述べ合うことで、話題が豊富になり、話が途切れることなく活動できた。
- ・ 大人が行うと、それぞれの人生経験や考え方がでて、他者によって読みが深まったり知識が広がったりする。児童においても有効か検証が必要である。
- ・ 活動を数回重ねると、それぞれの役割（読みの観点）が理解でき、慣れてきたら役割がなくても互いの意見交流ができ、楽しい読みが広がると考えられる。
- ・ 視点をもって作品に向かう一人学びの時間が有意義であり、児童が話し合いの前に一人で作品に対峙する学びも大きい。
- ・ 学生・教員と立場が違うメンバー構成のため、人間関係も多少影響し、話しづらい面もあったが、繰り返せばその関係も深まると思われる。

Ⅳ 考察

活動の観察や体験からLCが学び合いの活動形態として、学習意欲の向上のみならず、人とのかかわりの場の設定や他者から学ぼうとする点から有効性を見ることができた。その上でこれらから考えられる学び合いの授業の要素を今後の活用のために整理する。

- ・ 明確で共通の学習課題・目標があり、児童が意識していること
- ・ 個の学びの時間を確保し、集団の中で十分発揮できるようにすること
- ・ 個や集団で振り返りの場を設け、教師がその内容を把握し、支援に役立てること
- ・ 学び合いの進め方等、最低限のルールをもとに始め、そこから自分たちで作り上げること
- ・ 児童が互いの意見を聴き合い、互いの考えが違っていても話し合うことを楽しめること
- ・ 他者の考えを聞いて、自分の考えを吟味し、他者からの学びで、自分を見つめなおすこと

今年度は実習研究Ⅱのみの実践研究となった。今後、より多くの教科や単元で、学び合いの活動形態を取り入れた授業を実践し、児童の変容や授業観察を通して、学び合いの要素を更に検討していきたい。

また、それらをもとに、教科だけでなく、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間並びに特別活動等においても、多角的に活用していくためそれぞれの発展的・応用的な方法を追求し、実践としての「学び合う学級づくり」を具体的に進め、学習意欲の向上と人間関係づくりに貢献していきたい。